

第 10 回 西日本インカレ（合同研究会）専用企画シート

必ず＜企画シート作成上の注意＞をご確認いただき、ご記入をお願いいたします。

大学名（フリガナ）	学部名（フリガナ）	所属ゼミナール名（フリガナ）
オオサカケイザイダイガク	ケイザイガクブ	ハットリ ケiske ゼミナール
大阪経済大学	経済学部	服部 圭介 ゼミナール

チーム名（フリガナ）	代表者名（フリガナ）	チーム人数（代表者含む）
チーター ジャスティス ケiske	フクイ ナオ	6 名
チーター・J・ケiske	福井 菜緒	

研究テーマ（発表タイトル）

コミュニケーションが不正を防ぐ!? ～ごまかしの心理に迫る行動実験～

1. 研究概要（目的・狙いなど）

あらゆる組織（企業、学校、家庭など）において、嘘やごまかしなどの「不正行為」が深刻な問題を引き起こすことがあります。例えば、最近では電力会社上層部の不正な金品授受疑惑、一昔前ではエンロン事件などの不正会計事件、また学校などにおいてもカンニングや出席のごまかしなど、規模の大小を問わず不正行為は後を絶ちません。組織において不正が起こる要因として「**コミュニケーションの不足**」が挙げられることもありますが、一方で十分なコミュニケーション機会を有している「**馴れ合いの関係**」が挙げられることもあります。私たちは、**集団においてメンバー間の「コミュニケーションが不正行為を防ぐのか、それとも生み出してしまふのか」を明らかにする**ために、「間違い探しゲーム」を用いた簡単な**行動実験**を設計し、この謎に挑戦しました。

2. 研究テーマの現状分析（歴史的背景、マーケット環境など）

人がなぜ不正な行為に手を染めてしまうのかという問題は、経済学や心理学などの行動科学において古くから研究がなされています。例えばノーベル経済学賞受賞者であるゲイリー・ベッカーは、「不正行為は不正行為によって得られる利益と、発覚する確率、その際の罰の大きさを比較することによって行われる合理的な行動である」として、不正行為を防ぐメカニズムの研究を始めました。最近では、アメリカの有名な行動経済学者であるダン・アリエーは、その著書「ずる」のなかで様々な不正のメカニズムを解き明かす行動実験を紹介しています。しかしながら、**事前に人々の間で行われるコミュニケーションの有無が、その人々のその後の不正行為の有無にどのような影響を及ぼすかについては、私たちの知る限り、研究がありません**。また、実際に不正行為を行った人が、その直後にどのような心理状況にあるのかを行動実験によって追跡した研究も、なされていません。

3. 研究テーマの課題

「コミュニケーションと不正の関係」を詳細にすること、具体的には「**コミュニケーションの機会を取ることによって、後の作業において不正が起こるリスクかはどのように変わるのか**」「**不正を働いた人と正直に行動した人の間で、正義感やリスク選好、社会への関心などについて、どのような違いが見られるか**」という2つの研究テーマを設けました。

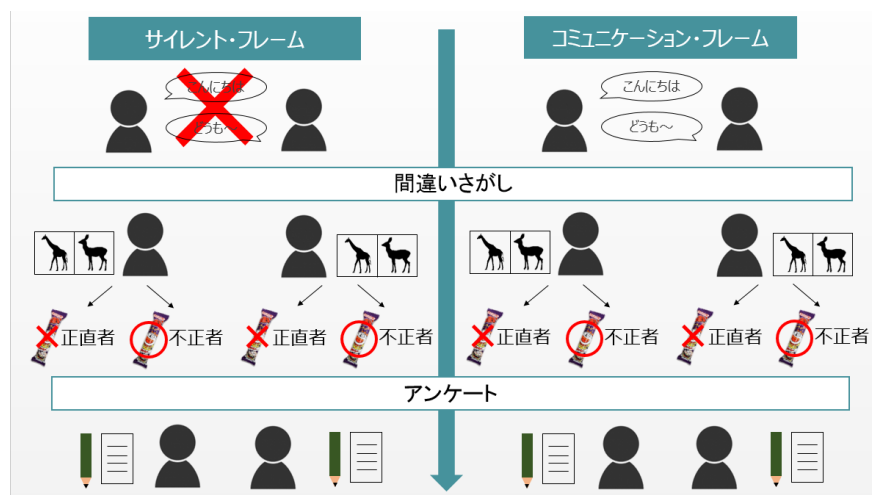
この問題に答えることにより、例えば企業の不正会計の発生を防ぐためには、コミュニケーションの機会がなかったような人たちで監査チームを構成すれば良いのか、それとも監査チームが頻繁にコミュニケーションをとり信頼関係（もしくは馴れ合い関係）を築くべきなのかといった問題から、カンニングを防ぐためにはコミュニケーションをとったことのあるような顔見知りや近くに座って受験するよう

な配置にするべきかどうかといった問題まで、幅広い問題に対して示唆を与えることができます。

4. 課題解決策（新たなビジネスモデル・理論など）

コミュニケーションが不正行為の発生に及ぼす影響を調べるためには、被験者の行動を実際に観察する「行動実験」が不可欠です。そこで私たちは、被験者に「間違い探しゲーム」に参加してもらい、ゲームに成功すれば報酬（お菓子）がもらえるという、実際の人々の「報酬欲しさからの不正行為」を観察できる行動実験を設計しました。

具体的には、ランダムに教室に集められた被験者（ペア）に「間違い探しゲーム（2枚の写真の相違点を探す）」を、被験者ペアのみで（実験者は退室し）行ってもらいます。被験者ペアには、「間違いを4つ以上発見できたら、すぐそばにある箱からお菓子を取り部屋を出てください」と伝えます。実際には、間違いは3つしか存在しないため、報酬を取って教室を出た被験者は不正を働いたことになります。部屋に残されたペアには、実際には間違いを見つけていないのに、お菓子をとって退室することが可能であるという環境を私たちが作っている、という点に独創性があります。



この間違い探しゲームを行う前に、(A) ペアはコミュニケーションを取る機会を与えられず、すぐに間違い探しを行う『サイレント・フレーム』と、(B) ペアで2分間のコミュニケーションを取ってもらう『コミュニケーション・フレーム』にランダムに分け、その2つのフレームの不正を行った割合や度合いなどを比較します。これにより、事前のコミュニケーションが、人々の不正を防ぐのか促すのかわかります。さらに、部屋を出た被験者に対してその場の心理状況を調査するためのアンケートを実施することで、不正もし

くは正直な行動を取った直後の人々の心理状況がどのように異なるのかを調べることができます。

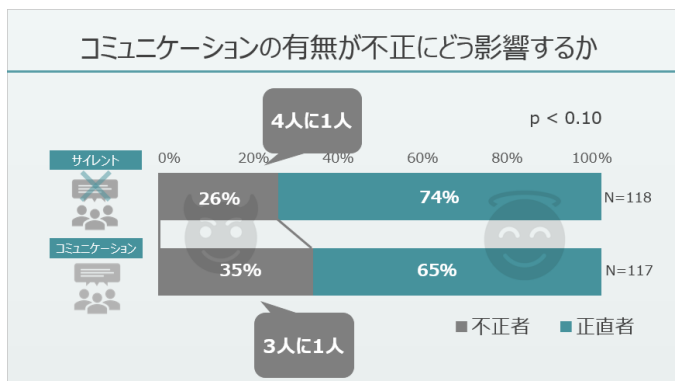
5. 研究・活動内容（アンケート調査、商品開発など）

私たちは、上記のような行動実験を大阪経済大学の学生 236 名を対象として行いました（実施期間 9 月 27 日～10 月 8 日）。具体的には、講義終わりや休憩時間で時間に余裕のありそうな学生に報酬のある実験への依頼をし、実験室（教室）へ移動してもらいます。ペアは初対面の人同士で組ませ、ペアの相手が間違い探しを行なっている様子が見えるような環境を作りました。ペアはランダムに上記の(A) サイレント・フレームもしくは(B) コミュニケーション・フレームに分けられ、(A) にはすぐに間違い探しを行なってもらい (B) 2 分のコミュニケーションを取ってもらった後に間違い探しを行なってもらいました。その後、部屋を出た場所で私たちがアンケート用紙を渡され、それに回答して実験は終了です。このような綿密に練られた実験から、コミュニケーションが不正の発生に及ぼす影響を考察することができます。

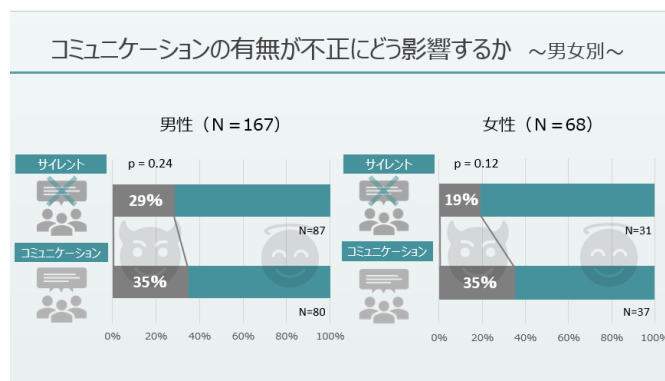
6. 結果や今後の取り組み

実験結果として以下の6つの主要な結果を得ました。

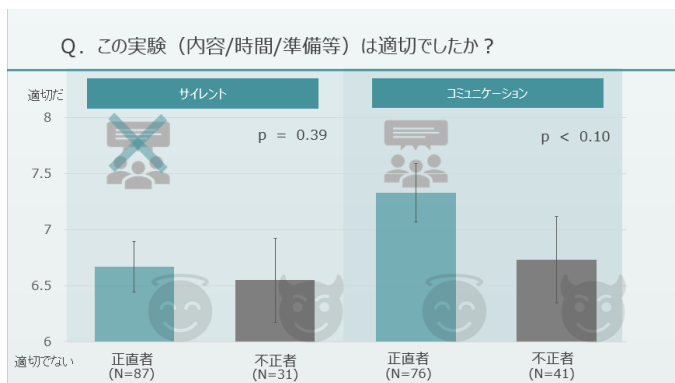
①



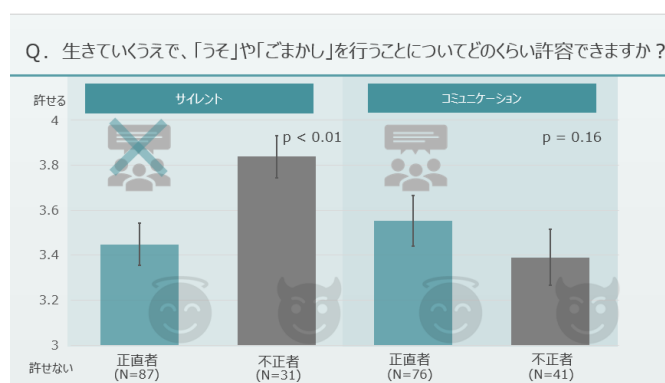
②



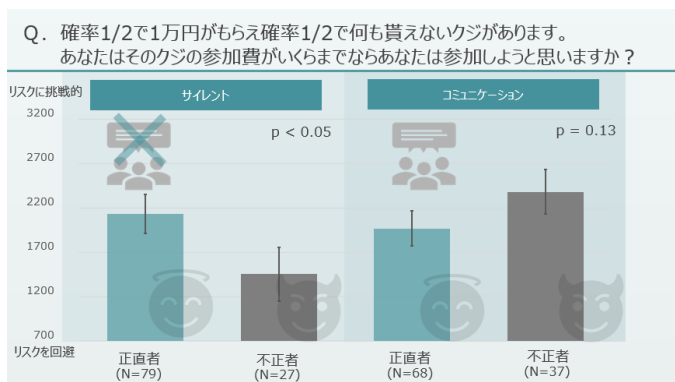
③



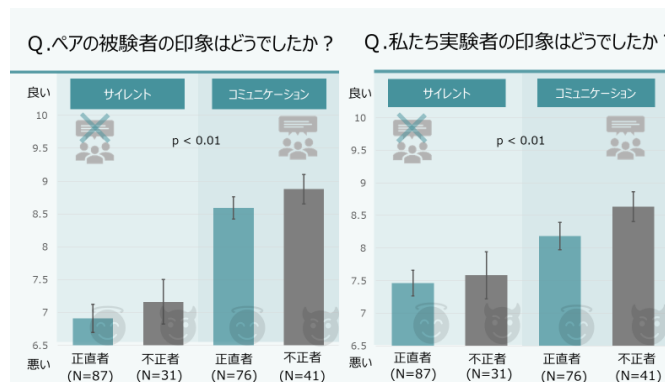
④



⑤



⑥



①コミュニケーション・フレームの不正者の割合は 35%、サイレント・フレームの不正者の割合は 26%となり、コミュニケーション・フレームの不正者は有意に ($p < 0.10$) 高くなりました。つまり、**コミュニケーションがより不正行為を誘発すること**がわかりました。

②男女比較をした際、男性はコミュニケーションをとることによって不正者の割合が 6 % 増えたのに対して、女性は 16 % 増えました。ここから、**コミュニケーションが不正行為を誘発するという傾向は、女性に強く働く**ということがわかりました。

③コミュニケーション・フレームの不正者は、実験内容を低く評価しているのに対し、正直者は実験内容を高く評価しました。このことから、コミュニケーション・フレームの不正者は、自身の不正を実験内容のせいであると、「**責任転嫁**」をし、「**自己正当化**」する傾向があるとわかりました。

④サイレント・フレームの不正者は、うそやごまかしは仕方がないもので、他の人もやっていると、自身の不正を「**一般化**」し、「**自己正当化**」する傾向があるとわかりました。

⑤サイレント・フレームの不正者は、不正をした直後だと、**次のリスクに回避的な**気持ちになっているのに対して、コミュニケーション・フレームの不正者は、**次のリスクに挑戦的な**気持ちになることがわかりました

⑥コミュニケーション・フレームは、サイレント・フレームに比べ、会話をする機会があったペアの被験者の印象を良いと答えました。また、会話をする機会がなかった私たち実験者の印象も良いと答え、**コミュニケーションはかかわった相手の印象を良くする**という効果があることがわかりました。

以上の結果を応用した例について紹介します。

1 つめは、大学でのカンニング行為についてです。現状として、多くの大学の定期試験では、試験の際に座席指定がなく、自由に座る場所を選ぶことができます。つまり、試験直前まで隣にいる友人とコミュニケーションがとれてしまう「コミュニケーション・フレーム」になっているということです。大学側から座席をランダムに指定し、試験直前にコミュニケーションがとれない「サイレント・フレーム」の環境に近づけることで、不正行為を減らすことができると考えます。

2 つめは、企業での不正会計についてです。監査法人となれ合いによって不正会計が生まれたという事例があります。このようなことを回避するために、会計課には常に新しい人材をいれることで「サイレント・フレーム」の環境となり、監査法人となれ合いの関係が生まれず、不正会計を減らすことができると考えます。

今回の実験では、作業の直前にコミュニケーションの機会を持つで、不正が多く生まれるという結果になりましたが、コミュニケーションは、学校や企業において必要不可欠な要素となっています。コミュニケーションをとることで、もちろんメリットは多くあります。しかし、作業直前に「コミュニケーション」をとることで「不正を生みやすい」というデメリットがあるということを、この研究結果は示しています。

今後の取り組みについて、今回は「水平的コミュニケーション（被験者同士のコミュニケーション）」「個人作業」「被験者どうしが知り合いでない」という状況での実験を行いました。今後は、「垂直的コミュニケーション（実験者とのコミュニケーション）」をとり監督者となれ合うことによって不正は誘発されるのか防がれるのか、また、作業を個人ではなく集団で行うとどのように変わるのか、被験者が知り合い同士でも直前にサイレント・フレームにすることによって不正は減るのか、これらについても実験していこうと考えています。

7. 参考文献

ダン・アリエリー（2012）『ずる 嘘とごまかしの行動経済学』、早川書房出版

NTT コミュニケーションズ（2019）「業務効率がアップする！社内コミュニケーションを活性化させる方法」

<https://www.ntt.com/business/services/voice-video/uc-conferencing/conferencing/introduction/13.html>

日経ビジネスオンライン（2018）「コミュニケーションの多いチームは本当に生産性が高いのか？」【人事データ・ピープルアナリティクス最前線】<https://special.nikkeibp.co.jp/atcl/NBO/18/bizreach/interview11/>

● パワーポイント内に動画を使用されている場合、動画を使用しているスライドのページをご記入ください。

該当なし

● 発表時に使用する成果物（例、商品化した●●、店舗で配布したパンフレット、調査に使用したアンケート）

該当なし

【企画シート作成上の注意】※「第10回 西日本インカレ（合同研究会）大会参加要項」も合わせてご確認のうえ、企画シートの作成を行ってください。

- ・本企画シートは審査の対象となり、予選会・本選の前に、審査を行っていただく大学教員・企業の方々に事前にお渡しいたします。
- ・本企画シートは、「日本語」で書かれたものとし、1チーム・1点提出してください。また、翌年3月に公開予定の「日経ビジネス電子版」にリンクされた特設サイトに掲載されます。
- ・本企画シートの項目に沿って、ご記入をお願いいたします。各項目に文字数制限はありませんが、1～7以外の項目を追加することは「不可」とさせていただきます。
- ・本企画シートは、作成上の注意を含め、4ページ以内に収めてください。事務局から審査員に渡す際は、A4サイズでプリントし、4ページ目までをお渡しします。
- ・大会参加申込み時点から、チーム編成の変更（チームの人数・交代など）は、「不可」とさせていただきます。ただし、チームメンバーの留学等やむを得ない事情でチーム編成に変更が生じる場合は、西日本インカレ事務局にご連絡ください。事務局より手続きについてご連絡をさせていただきます。なお、参加申込書提出時からのチーム名変更は「不可」とさせていただきます。
- ・商品写真、人物写真、音楽などを掲載・利用する場合、必ず著作権、版権の使用許諾を得てください。日経BP社・日経BPマーケティングは一切の責任を負いません。
- ・書籍や新聞等の文献から引用した場合は、出典先（使用した文献のタイトル・著者名・発行所名・発行年月など）を明記してください。統計・図表・文書等を引用した場合も同様に明記してください。また、Webサイト上の資料を利用した場合は、URLとアクセスした日付を明記してください。
- ・発表時に使用する成果物がありましたらご記入ください。記入がない成果物は大会当日使用することができません。また記入いただいた内容について、事務局から代表者の方に確認をさせていただきます。
- ・電話番号や住所などの個人情報は記載しないでください。